

実践研究

大学生のサービ斯拉ーニングにおける運動指導が 小学校の体育的活動に及ぼす影響の検討

— 草津市における長縄オリエンテーションを対象として —

赤 沢 真 世・築 田 尚 晃
小 沢 道 紀・大 友 智

要 旨

近年、大学と県や市が連携を取った活動が活発に進められている。立命館大学スポーツ健康科学部においても、2011年度から草津市教育委員会と連携活動を始め、サービ斯拉ーニング科目を設定している。そこでは、市内公立小学校の全6年生が参加するスポーツ大会「ジュニア・スポーツ・フェスティバル KUSATSU」の開催に向けて多様な活動を行っている。本研究では、その一連のプログラムの中でも中心的な活動となる長縄8の字跳びの指導に焦点をあて、学生の運動指導が小学生の体育的活動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、活動評価アンケートの分析を行った。その結果、特に「意欲」の向上や「感動の体験」において高評価が得られた。学生の言葉がけの分析では、矯正的具体な声かけが有効だと評価されており、評価が低い「成果」「学び方」においては言葉がけが有効な手立ての一つであることが明らかになった。本結果をもとに今後のサービ斯拉ーニングにおける指導の充実が求められる。

キーワード

官学連携、学校ボランティア、活動評価、言葉がけ

I. はじめに

1. スポーツ健康科学部におけるサービ斯拉ーニングの位置づけと「ジュニア・スポーツ・フェスティバル」

近年、高等教育機関である大学と行政機関である県や市が官学連携を取り、お互いの有する資源を有効に活用しようとする動きが活発である。大学にとっては、大学が所在する地域への研究資源等の提供を通して、地域の活性化を促すような社会的貢献が期待できる。行政機関にとっては、地域住民に対する行政サービスの向上に役立ち、地域の期待に応えることが可能になる¹⁾。

立命館大学においても、そのような動きを十分に取り入れてきた。例えば、立命館大学BKCキャンパスがある滋賀県草津市と立命館大学との間で、2009年6月に結ばれた「サービ斯拉ー

ニング協定」もその一つである。本研究は、この「サービスマーケティング協定」に関連する一連の研究として位置づけられている。

2010年にスポーツ健康科学部が開設された。その設置に至る過程で、理論と実践によってリーダーシップとコーチング力を高めることが教学プログラム上の基盤の一つに位置づけられた。そのため、大学の講義で学ぶ「理論」と、講義外の多様な活動で学ぶ「実践」の二つの学習活動を有機的に関連させる必要があった。

そこで、上記の「実践」活動として、第一に、企業等の社会で実際に行われていることを体験することによって理解し、そこから得た疑問を「理論」の学習活動へとフィードバックするものをインターンシップとして位置づけた。具体的には、スポーツチームなどで様々な運営のサポートや実態を理解することによって課題を解決していく活動である。第二に、本研究が対象とするサービスマーケティングがある。サービスマーケティングとは、地域の活動に積極的にに関わり、地域に入りこむ活動を踏まえて、自らが社会を構成するコミュニティの中で果たす役割を理解し、さらに、自らの活動を積極的に振り返ることによって「理論」の学習活動の意義を明確化する活動である。

両者の相違を学生の目線から見れば、前者のインターンシップでは、学生自身が行き先によって、複数のインターンシップ先からある特定のインターンシップ先を選択するが、後者のサービスマーケティングでは、学生自身が何をすることができるのかによって、複数のサービスマーケティングの中からある特定のものを選択する。つまり、サービスマーケティングでは、学生自身に自身が果たせる役割を意識させ、活動内容への強い期待を持つことが前提とされている。この点が、サービスマーケティングの特色である。スポーツ健康科学部では、先述の「サービスマーケティング協定」に基づいて、2011年度よりサービスマーケティングを専門科目として位置づけている。

スポーツ健康科学部として、このサービスマーケティングにおいてとりわけ重視しているのは、小中学生の学習促進活動に積極的に関わっていくことによって、自らの現状を振り返ること、また教育現場に関わることによって、特に小学校教員、あるいは中・高等学校教員を目指す学生の教える力を高めていく素地を作ることである。他方、草津市教育委員会では、2011年4月に策定したスポーツ振興計画の中で、「小学校においては市内の児童が集まったの体育大会などの開催によって目標に向かって努力する意識を育てるとともに（育み・ふれあい）、大学とのサービスマーケティングなどによる事業連携を行い、児童と学生との交流や（ふれあい）、市と大学とのより強い関係を創っていきます（結びつき・環境）」(p.15)と記載されているように、スポーツ好きの子どもを育成するための方法の一つとして、サービスマーケティングが意識されている。

そして、このような二者の意識を踏まえ、全市の小中学生を対象としたスポーツ大会である「ジュニア・スポーツ・フェスティバル KUSATSU」（以下、JSF と略す）の開催を行うことが決定し、この大会をサービスマーケティングの活動の主軸として位置づけることとなったのである。

JSF は、草津市小学校体育連盟の主管で、10月上旬～中旬の1日で行われている。草津市内の全ての小学校6年生を対象とし、2011年、2012年共に約1200名の児童が参加した。目標としては、次の2点が掲げられている。

- 【目標 1】 市内小学校児童が日頃の練習の成果を発揮して記録の向上を目指し、他校の児童と競い合う経験を通して、体力の向上および運動に親しむ資質や能力の育成を図る。
- 【目標 2】 市内小学校児童が、鍛え上げられた技と力の素晴らしさや、スポーツの魅力に触れる中で、様々なスポーツに関心を持ち、進んで運動しようとする態度を育てる。
- (「平成 23 年度ジュニア・スポーツ・フェスティバル KUSATSU (J.S.F) 実施概要」)

具体的なプログラムとしては、学校対抗の 4 × 100m リレー、全員参加の長縄 8 の字跳び、大学に存在する多様な団体によるスポーツ体験、の 3 つを軸としている。

この大会を主軸として、2012 年度におけるサービスマーケティングの学生は学校ボランティアとして以下のような具体的な活動を行った。

- ① JSF に向けた長縄 8 の字跳びの模範演技・指導 (以下、長縄オリエンテーションと示す) (7 月、9 月、10 月)
- ② JSF 当日の運営・各学校の補佐 (10 月)
- ③ 運動会などの学校行事の支援 (主に 9 月)
- ④ 水泳授業の支援 (主に 7 月)
- ⑤ スポーツテストの支援 (6 月)

とりわけ①は、サービスマーケティングの学生が JSF での全小学校対抗 8 の字跳び大会に向けて、跳び方の模範演技や、子どもたちの意欲や技能を高める指導のあり方について学生自身で企画を行った体育的活動²⁾である。そして草津市内の全小学校で授業一時間 (45 分) あるいは朝の学習などの時間を頂き、学生が主体となり小学生 6 年生に直接指導を行った。したがって、関わった時間や質から見て、サービスマーケティングとしての学習活動における最も重要な柱となる活動であると言える。

なお、実際にサービスマーケティングを実施するにあたっては、教育委員会が主催する JSF 以外では、各小学校からの依頼を教育委員会で取りまとめ、その日時を学生にマナバ・フォリオ²⁾で提示し、授業との関係なども踏まえて学生が判断した上で、可能な限り小学校に支援に行った。教育委員会は、学生の意見を聞きつつ担当する小学校を決定し、学生が連絡などの面において責任を持つ仕組みを作った。また、指導する時間や支援内容においても、小学校によって異なる面が多いが、この点についても、教育委員会が調整を行った。

これらの活動に関して、2011 年度の JSF の開催後に教育委員会が小学校教師を対象に行った自由記述のアンケートでは、プログラムとしての評価は高く、次年度以降の期待が多く寄せられた。また、サービスマーケティングを受講した大学生は自分自身がプログラムを通して成長したとの声も聞いた。また、これらの支援は、2011 年度よりも 2012 年度実施の方が依頼校ならびに依頼内容が増えており、年度を経るに従って、学校側の学生に対する信頼が高まってきていると考えられる。

2. 本稿の目的

このように、スポーツ健康科学部の学生がサービスマーケティングを通して小学校現場に関わる意義は、教師および受講した学生の双方において感じられてきているといえる。しかしながら、学生が JSF に向けた体育的活動において運動指導や補助を行っていることが、小学生に実際にどの

ように受け止められているのか、あるいは指導や関わり方にどのような課題があるのかについては、これまで明らかにしていない。小学生にとって体育的活動は、スポーツライフの育成に向けた基礎的な活動であることを考えれば、スポーツ健康科学部所属学生による運動指導の影響を明らかにした上で、今後、運動好きの子供を地域で多く輩出していくためにも、サービスマーケティングの活動を構築・発展していくことが求められる。

そこで、本稿では、サービスマーケティングの軸となる長縄オリエンテーション（先述の①）に焦点を当て、学生のサービスマーケティングでの運動指導が小学校の体育的活動に及ぼす影響を検討することを目的とする。具体的には、長縄オリエンテーションの活動が、活動に参加した児童にどのように受け止められ、評価されているのか、また長縄オリエンテーションが児童の技能の向上や運動に対する意欲の向上に影響を与えているのかを明らかにしたいと考える。加えてその結果から、今後の課題および改善点を見出し、サービスマーケティングを受講する学生への指導方針・内容を吟味するための基礎資料としたい。

II 方法

1 調査方法、対象と調査時期

調査は、長縄オリエンテーションを実施した後に、各学校のクラス担任を通じて行った。活動に参加した児童に活動を振り返らせ、活動評価アンケートに記入させた³⁾。

長縄オリエンテーションは、7月中旬から10月19日のJSF本番までに、草津市の各小学校（全13小学校）を回り行われた（基本的には各校1回の訪問）。本稿が対象としたデータは、そのうち、7月中に行われた計5校の児童（計394名、当日欠席者は除く）を対象とした。どの小学校も1回目の訪問である。

それぞれの学校別・男女別の調査人数は以下のとおりである（表1）。

表1 調査対象学校と児童数（人）

学校	A 小学校	B 小学校	C 小学校	D 小学校	E 小学校	
男子	34	57	37	40	12	180
女子	42	49	49	54	20	214
計	76	106	86	94	32	計 394

2 アンケート調査項目

1) 調査票の項目について

小学生の体育的活動に関する指導を評価する明確な指標は見られないことから、体育の「授業」における指導を評価するために開発された形成的評価法（高橋・長谷川他 1994、長谷川・高橋他 1995）、及び深見・高橋（2002）によって開発された子どもの受け止め方の調査法を採用した。

表2に示したように、活動評価アンケートの項目は、長谷川他（1995）が小学校体育授業について開発した形成的評価票の項目（項目1-9）⁴⁾を参照し、「授業」を想定している文言を長

繩オリエントレーションの趣旨に即して表記を修正して作成した⁵⁾。また、大学生による言葉がけの有無とその役立ち度も調査するため、項目 10（記述および役立ち度の 3 択）を加えた。

2) 調査項目の位置づけと設定理由

表 2 の質問項目 1～9 は、「成果」（項目 1, 2, 3）、「意欲・関心」（項目 4, 5）、「学び方」（項目 6, 7）、「協力」（項目 8, 9）の 4 因子 9 項目から成り立っている。

「成果」の因子は、出来たり、わかったりしたときに、子どもは感動を味わうことができるという考えから、端的に体育の陶冶目標に対する実現度や、技能的成果を見ようとする指標である。

「意欲・関心」の因子は、活動が楽しかったかどうかの指標となるもので、「子どもの体育授業に対する総合的評価に対してもっとも強い規定力をもつ」、「体育授業の成否を決定づける要因といっても過言ではない」とされる因子である。

「学び方」の因子は、学習の自発性や学習の合理性を問うものであり、「考える」「工夫する」といった項目や学習規律に関するものである。

最後の「協力」の因子は、友達との人間関係を評価するものである。「体育授業では人間関係の様態が学習に重大な影響を及ぼす」という見方から、重要な因子・項目として評価項目として位置づいている。

表 2 活動評価アンケートの調査項目と回答形式

質問	質問文	回答形式
1	深く心に残ることや、感動することがありましたか。	3 択（単数回答） はい：3 どちらでもない：2 いいえ：1
2	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。	
3	「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	
4	せいっぱい、全力をつくして練習することができましたか。	
5	楽しかったですか。	
6	自分から進んで練習することができましたか。	
7	自分のめあてにむかって何回も練習することができましたか。	
8	友だちと協力して、なかよく取り組みましたか。	
9	友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。	
10	今日の練習で、大学生に声をかけてもらいましたか。	10 で回答 3 のみ 自由記述
	10-a それとはどんなことでしたか。	
	10-b それは役に立ちましたか。	3 択（単数回答） はい：3 どちらでもない：2 いいえ：1

これらの因子・項目について、全体の傾向を掴むとともに、男女別に受け止め方が異なるかどうかを明らかにし、今後の指導・対応について指針を得るため、性別による比較も行う。

また、学生は意識的に児童への言葉がけを行っている。そこで、学生という言葉がけの特徴と、児

童への影響を検討するため、児童が「受け取った」と感じた言葉がけの内容（質）と、実際にその言葉がけが「役に立った」と感じたかどうかについて、その関係を検討する。なお、言葉がけの内容については、体育授業における教師のフィードバックについての先行研究（深見・高橋、2003）において示されているカテゴリーをもとに、自由記述を以下の表3での4つのカテゴリーに分けて、その頻度と役立ち度との関係を見ていく。

以上の理由から表2の調査項目10項目が位置づけられた。

表3 言葉がけの内容におけるカテゴリー分けと具体例

カテゴリー		言葉がけの具体例
肯定的	一般的	「ドンマイ」「がんばれ」「いいよ」
	具体的	「うまく真ん中で跳べたね」「上手に縦方向に抜かれたね」
矯正的	一般的	「声出していこう」「引っ掛かっても気にしない」
	具体的	「もう少し走りながらジャンプしたほうがいいよ」 「少し端に寄っているから真ん中で跳ぼう」

3) 集計、評価方法

表2の回答形式に示したように、各項目におけるアンケート結果を「はい」（3点）、「どちらでもない」（2点）、「いいえ」（1点）に換算して集計し、そこで得られた平均点を算出するとともに、長谷川・高橋ら（1995）による「体育授業における形成的評価基準表」に照らして、5段階評価の評定を行った。「形成的評価基準表」とは、今回用いた調査票の同項目での調査における結果の数値が、5段階評価（最もよい点数が5である）のどの段階に位置づくのかという基準を、クラス平均得点の平均値と標準偏差をもとに、得点分布を5つの段階に分けることによって設定されたものである。

評定3を子どもの目から見て「普通の授業」、評定4以上を「良い授業」、評定5は「特に優れた授業」として、一方、評定2以下を「普通より劣る授業」としてとらえることができる。また、この「形成的評価基準表」では、運動の種目別の診断基準も開発されているが（器械運動、陸上運動、ボール運動）、今回は全運動種目を対象とした診断基準に即して数値を記している⁶⁾。（なお、本論文の最後に資料として示した。）

3 データ処理

アンケート調査で得られたデータを統計ソフト『エクセル解析（2010）』を用いて処理した。

Ⅲ 結果と考察

1 全体の傾向および男女比較について

項目ごとに、全体（n=394）および男女別での平均値および標準偏差をもとめた。また、各因子については、それぞれの項目の相加平均得点をもとめた（表4）。全体の平均の数値の横に示した（ ）内の数字は、先に述べた長谷川・高橋ら（1995）による「体育授業における形成的

評価基準表」における5段階評価の評定である。

まず、全体の総合評価は2.50であった⁷⁾。形成的評価基準表に照らし合わせた場合、授業評価としては「3」と位置づけられる。数値としては高いとは言えないものの、体育科教諭ではない学生が、指導における関係性が成立していない児童を相手に、朝学習の時間（25分間）や1時間授業（45分）の飛び込み授業の形で行った活動としては、その評価は決して低いものではないと考える。

なかでも、因子2「意欲・態度」は2.82（基準では「4」）を示し、運動に対する意欲の向上への影響力は高かったと評価できる。とりわけ項目4「精一杯の運動」は、長縄オリエンテーションの第一義的な目的と合致する項目であり、2.82という高い数値は学生によるオリエンテーションの活動の成果として十分に評価できると考えられる。

表4 各項目および因子についての評価結果（全体、男女別）

因子・質問項目		全体		女子		男子		t
		M	SD	M	SD	M	SD	
因子	1 成果（項目12, 3）	2.38 (3)	0.69	2.46 (4)	0.44	2.29 (3)	0.53	3.34**
	2 意欲・関心（項目4, 5）	2.82 (4)	0.45	2.86 (4)	0.33	2.77 (3)	0.39	2.36*
	3 学び方（項目6, 7）	2.35 (3)	0.66	2.42 (3)	0.52	2.28 (2)	0.56	2.61**
	4 協力（項目8, 9）	2.49 (3)	0.65	2.63 (4)	0.46	2.34 (2)	0.55	5.59**
項目	1. 感動の体験	2.39 (4)	0.67	2.51 (4)	0.71	2.26 (3)	0.60	3.82**
	2. 技能の伸び	2.31 (3)	0.71	2.34 (3)	0.69	2.28 (3)	0.73	0.71
	3. 新しい発見	2.43 (3)	0.70	2.53 (3)	0.64	2.33 (3)	0.76	2.78**
	4. 精一杯の運動	2.82 (4)	0.46	2.88 (4)	0.37	2.74 (3)	0.53	3.17**
	5. 楽しさの体験	2.82 (3)	0.44	2.84 (4)	0.42	2.81 (3)	0.43	0.60
	6. 自主的学習	2.40 (3)	0.65	2.44 (3)	0.62	2.35 (3)	0.68	1.49
	7. めあてをもった学習	2.30 (3)	0.68	2.39 (3)	0.64	2.20 (2)	0.69	2.75**
	8. 仲良く学習	2.65 (3)	0.57	2.81 (4)	0.45	2.46 (3)	0.64	6.27**
	9. 協力的学習	2.34 (2)	0.69	2.44 (3)	0.67	2.22 (2)	0.70	3.21**
総合評価（9項目の総合平均）		2.50 (3)	0.66	2.58 (4)	0.61	2.42 (3)	0.69	7.81**

各因子の得点は当該項目の相加平均得点。* $p < 0.5$, ** $p < 0.01$

※（ ）内は、「形成的評価診断基準」（5段階評価）（長谷川他、1995）に照らし合わせたときの評点

また、成果の因子に含まれる「感動の体験」（項目1）の数値は2.39である。数値だけを見れば関心・意欲の因子に比較して高くないものの、診断基準に照らし合わせた際には「4」という位置づけとなっている。このことから、長縄オリエンテーションの活動の中で児童が「できる」と感じられた機会が多くあったことが示される。この点についても、JSFの「できることへの喜びから感動を味わう」という目標につながる、高い評価が得られていると言える。

次に、子どもの性によって評価得点に違いがあるのかについて有意差検定を行った。因子別では、どの因子においても女子の方が統計的に有意に高い数値となった。これは高橋（2003）が「女子の方が評価点が若干高くなる」傾向があると指摘していることと同様であり、草津市の小

学生においても同様の傾向があるとみられる。また、項目別に見ると、本調査の結果からは、とりわけ「協力」の因子では女子の方が男子に比べ、有意に高い数値を示している。集団での活動の中で、女子は目標に向かってクラスで協力して課題を達成しようとするに、より意識を払っていることを表していると考えられる。この点に関して、持久走の指導に焦点をあてた大友他（1995、1996）の先行研究では、男子は動的な態度因子（「快的感情」「行為傾向」）に高い評価をつけるのに対し、女子は静的な態度因子（「認知的」「課題達成要求」など）に関して高い評価をつけることが指摘されており、本調査においても共通した傾向があるといえる。性別によるこうした受け止め方の違いは、学生による指導の内容や展開のあり方や子どもたちへの関わり方を考慮する際に意識しておくべき点として重要である。

以上のように、全般的な活動の評価としては低くないことがわかる。しかしながら一方で、評価において低い数値を示した項目・因子からは課題も明らかとなる。評価において男女ともに数値が低い状況であるのは、「自分のめあてをもった練習ができたか」（項目7）である。これは、活動においては男女ともに自分なりの目標を持って活動をすることが十分に出来ていない（意識できていない）ことを意味している。アンケート実施時期が、JSF に対する意識がまだ高くない7月であることも数値の低さの一つの理由として考えられる。けれども、自分のめあてや活動の必要性を意識させることができれば全体の活動評価も高くなると考えられるため、今後の課題として、8の字跳び活動の目的・意義をいかに児童に伝えるのか、あるいはそのための活動の流れをいかに作るかという点があげられよう。

2 言葉がけの有無とその内容

質問項目10「今日の活動の中で大学生に声をかけられましたか」について、言葉がけがあったと感じた子どもの割合は表5のとおりであった。

表5 言葉がけがあったと感じた子どもの人数（人）と割合（％）

	人数（比率）
言葉なかった	164（.42）
言葉あった	230（.58）
総計	394（100）

さらに、「大学生に声をかけられた」と回答した児童のうち、その具体的内容に関する自由記述を、表3に具体例とともに示した4つのカテゴリー（「肯定的一般的」「肯定的具体的」「矯正一般的」「矯正的具体的」）に分類した。その結果を表6に示す。

表6 言葉がけの 카테고리別の割合 (人数、カッコ内は比率)

言葉がけの内容		人数 (比率)
肯定的	一般的	80 (.35)
	具体的	7 (.03)
矯正的	一般的	23 (.10)
	具体的	104 (.45)
不明 (無回答)		16 (.07)
計		230 (100)

さらに表6をもとに、言葉がけの内容をカテゴリー別に分類し、役立ち度 (質問項目 10b) との関連をみたものを表7に示す。

表7 学生の言葉がけの質と子どもの受け止め方の関係 (のべ数、カッコ内は比率)

			子どもの受け止め方				
			無記入	役に立たない	どちらでもない	役に立った	合計
言葉がけの質	肯定的	一般的	4 (.02)	3 (.01)	17 (.07)	56 (.24)	80 (.35)
		具体的	0 (.00)	0 (.00)	1 (.00)	6 (.03)	7 (.03)
	矯正的	一般的	0 (.00)	1 (.00)	3 (.01)	19 (.08)	23 (.10)
		具体的	1 (.00)	0 (.00)	7 (.03)	96 (.42)	104 (.45)
	無記入		3 (.01)	1 (.00)	3 (.01)	9 (.04)	16 (.07)
合計		8 (.03)	5 (.02)	31 (.14)	186 (.81)	230 (100)	

最後に、言葉がけが活動の評価に影響を与えているのか否かを検討するため、言葉がけの有無について、各項目の評価の平均得点を比較し、有意差検定を行った結果が表8である。

表5において、言葉がけがあったと感じた児童の割合は、計394名中230名と、全体の6割弱に上る。活動においては、学生は担当の学級を中心として学級全体への言葉がけを絶えず行っていた (「ドンマイ」「大丈夫、大丈夫」「前に詰めて」など)。加えて、うまく跳べないなどの失敗をしてしまった児童がいればその児童のもとに行き、個別に声をかけている様子も見られた。この、学生による全体への言葉がけや一人一人への言葉がけが児童にも届き、「声をかけてもらった」と実感している割合が高い結果となった。

さらに、言葉がけの内容と役立ち度の関係 (表7) からは、学生からの言葉が「役だった」と答えた児童の割合は230名中186名 (81%) と非常に高い割合を示している。学生による言葉がけが活動の中で非常に高く評価されている。

では、どのような内容の言葉がけが実際に児童に受け止められていたのだろうか。結果からは次の三点が考察される。

第一に、表6が示すように、子どもたちが受け止めた学生からの言葉がけは、4つのカテゴリーのうち、「肯定的一般的」カテゴリーの言葉がけ (「ドンマイ!」「がんばれ!」などの励まし)

表 8 言葉がけ有無における活動評価の比較

因子・質問		全体		言葉がけ無		言葉がけ有		t
		M	SD	M	SD	M	SD	
因子	1 成果 (項目 12, 3)	2.38 (3)	0.69	2.24 (3)	0.72	2.48 (4)	0.66	-5.68**
	2 意欲・関心 (項目 4, 5)	2.82 (4)	0.45	2.79 (3)	0.47	2.84 (4)	0.44	-152
	3 学び方 (項目 6, 7)	2.35 (3)	0.66	2.22 (2)	0.67	2.45 (3)	0.65	-4.77**
	4 協力 (項目 8, 9)	2.49 (3)	0.65	2.45 (3)	0.65	2.52 (3)	0.65	-151
項目	1. 感動の体験	2.39 (4)	0.67	2.27 (3)	0.70	2.48 (4)	0.63	-3.20**
	2. 技能の伸び	2.31 (3)	0.71	2.14 (2)	0.72	2.43 (3)	0.67	-4.14**
	3. 新しい発見	2.43 (3)	0.70	2.32 (3)	0.73	2.51 (3)	0.67	-2.68**
	4. 精一杯の運動	2.82 (4)	0.46	2.78 (3)	0.48	2.83 (4)	0.45	-107
	5. 楽しさの体験	2.82 (3)	0.44	2.79 (3)	0.45	2.84 (3)	0.44	-107
	6. 自主的学習	2.40 (3)	0.65	2.31 (3)	0.64	2.46 (3)	0.64	-2.30*
	7. めあてをもった学習	2.30 (3)	0.68	2.13 (2)	0.68	2.43 (3)	0.65	-4.43**
	8. 仲良く学習	2.65 (3)	0.57	2.62 (3)	0.58	2.67 (3)	0.57	-0.81
	9. 協力的学習	2.34 (2)	0.69	2.28 (3)	0.67	2.38 (3)	0.69	-134
総合評価 (9 項目の総合平均)		2.50 (3)	0.66	2.40 (3)	0.68	2.56 (3)	0.63	-6.85**

各因子の得点は当該科目の相加平均得点。

* $p < 0.5$, ** $p < 0.01$

が全体の 35%、「矯正的具体的」カテゴリーの言葉がけ（「もう少し走りながらジャンプしたほうがいいよ」「端に寄っているから真ん中で跳ぼう」）は全体の 45%であり、これら二つのカテゴリーにほぼ全体が集約されている。前者のカテゴリーについては、学生が児童の学級や学年の士気を高め、一人一人の意欲を引き出そうとするものであり、後者のカテゴリーについては、長縄の技術やコツのポイントを絞り、伝えようとしたものである。学生がこの 2 点において意識的に児童に関わり、伝えようとしていたことが推測される。

第二に、今回の調査では多くの児童が「役立った」と回答しバラつきが見えにくい、とくに矯正的语言がけでは、「一般的」な言葉がけに比較して「具体的」な言葉がけがより「役立つ」と感じていることがわかる。児童に対する言葉は、つねに具体性を伴うことが必要であることが示されるとともに、学生が活動の中で具体的で児童にとって有効だと感じさせる言葉がけを一定数実践できていたととらえられる。

第三に、上記の 2 点の成果の背景には、草津市教育委員会に所属する受け入れ担当の指導教員が、学生に長縄 8 の字跳びの技術の向上や具体的な指導方法について講義や模範を示す機会を積極的に設定していたことがあると考えられる。長縄オリエンテーションに関わる学生に 8 の字跳びを練習させ、そこでの言葉がけを指導教員が模範的に示す取り組みを重ねた。そうした取り組みを通して、学生自身が技術のポイントを掴むとともに、言葉がけのあり方を体得していったと考えられる。

このように、ここまでの考察からは、長縄オリエンテーションにおいても体育授業と同様に指導の立場として位置づく学生が、全体あるいは一人一人の児童に対して具体的に言葉をかけてい

くことが重要であること、そしてそうした言葉がけが児童の活動での成果や意欲の向上などに影響力を持つことが推測される。

そこで、今回の活動の評価において、児童に対する言葉がけの有無による活動評価の数値に有意な差があるのか、あるとすればどのような観点において違いがあるのかを検討した。具体的には、言葉がけが「あった」と回答した児童と「無かった」と回答した児童をカテゴリー分けし、各項目において、形成的評価診断基準に照らした評定、および数値の差に統計的に有意な差があるかどうかを分析した（表8）。

その結果、診断基準における評価としては、言葉がけ「無」のカテゴリーに比べ、「有」のカテゴリーにおいては因子1（成果）、2（関心・意欲）、項目1（感動の体験）、4（精一杯の運動）において高い評価を得ている。また、因子3（学び方）においては、「無」が「2」と低い評価となるのに対して、「有」は「3」となっている。さらに注目すべきことに、項目1, 2, 3（「成果」の因子1に対応）、項目6, 7（「学び方」の因子3に対応）において、それぞれ統計的に有意に差があることが示された。

すなわち、言葉をかけてもらったと感じた児童は、技能面でも充実度・満足度がより高く、かつ、自分のめあてを意識した取り組みができていたという傾向が見られた。

全体の傾向について前述したように、とりわけ因子3「学び方」については、全体の数値が低く、今後改善が必要とされる「課題」として表出した。これらの結果より、児童が「自分のめあてを持った活動」としてより充実した活動に参加できるようにする手立ての一つとして、言葉がけを行うことが有効であることが示唆された。

一方で、表8において有意な差が見られず、言葉がけの有無のどちらも低い評価であった項目8, 9（因子4「協力」）については、言葉がけという手立てだけではなく、むしろ活動のシステム（クラスで一つの長縄を用いるのではなく、グループ化して取り組む等といった指導形態や、活動の流れなど）の工夫によって変化することが考えられる。長縄オリエンテーションでの指導形態や活動の流れ・展開についても、とりわけ協力場面を必然的に生じさせる活動の在り方について、今後改善や工夫が求められるであろう。

加えて、学校によって朝学習だけの場合、一時限を充てる場合、複数回活動に入った場合などの違いがあったことから、活動時間の差による活動評価の違いも考えられる。また、担当する学生も毎回同じではなく、学生の力量の差があることも推測できる。今回言葉がけの有無では差の見られなかった因子については、こうした他の変数による影響も大きいと考えられるため、これらの他の要素についても今後検討を進めていく必要がある。

IV まとめ

本稿では、草津市教育委員会が主催するJSFに向けて、官学連携で行われているサービスマーケティングのプログラムの一環として立命館大学スポーツ健康科学部生の行った運動指導が、小学校の体育的活動にどのような影響を及ぼしているのかを検討することを目的とした。具体的には、JSFで各小学校が競技する長縄8の字跳びの指導を行う長縄オリエンテーションの活動が、活動に参加した児童にどのように受け入れられているのか、あるいは、評価されているのか、また長

縄オリエンテーションが児童の技能の向上や運動に対する意欲の向上に影響を与えることができているのかを明らかにしようと試みた。

こうした目的のため、本稿では長縄オリエンテーションでの活動後に活動評価アンケートを実施した。その結果、JSF という目的意識がまだあまり芽生えていない時期において、加えて児童と関係性が築けていない学生が飛び込み授業の形で行った活動としては、全般的に十分評価できる結果となった。とりわけ、運動に対する意欲の向上や新しく出来ることが増えたという感動の体験においては高い評価が得られていた。

また、学生による言葉がけが児童にどのように受け止められているのかを、言葉がけの割合や内容をもとに分析した。その結果、学生の児童への声かけは児童にも有効なものとして受け止められていたことが示された。なかでも、具体的かつポイントを絞った（矯正的な）声かけは、とりわけ活動や成果に有効だったと受け止められている割合が高かった。さらに、言葉がけの有無は、児童の「成果」「学び方」に関する評価の違いに大きく関わり、言葉がけは児童が自分なりのめあてをもって活動に取り組む際の有効な手立ての一つであることが示唆された。

今回の調査結果を踏まえ、今後のサービラーニングの指導内容やあり方を再吟味するとともに、今後は、長縄オリエンテーションでの指導形態や活動時間の差による活動評価の違いや学生の力量との関係についても分析・検討を進めていきたい。

《資料》全運動種目を対象とした形成的評価診断基準（長谷川他、1995）

因子	項目	評定				
		5	4	3	2	1
成果	1. 感動の体験	3.00 ~ 2.62	2.61 ~ 2.29	2.28 ~ 1.90	1.89 ~ 1.57	1.56 ~ 1.00
	2. 技能の伸び	3.00 ~ 2.82	2.81 ~ 2.54	2.53 ~ 2.21	2.20 ~ 1.93	1.92 ~ 1.00
	3. 新しい発見	3.00 ~ 2.85	2.84 ~ 2.59	2.58 ~ 2.28	2.27 ~ 2.02	2.01 ~ 1.00
	因子の評価	3.00 ~ 2.70	2.69 ~ 2.45	2.44 ~ 2.15	2.14 ~ 1.91	1.90 ~ 1.00
意欲・関心	4. 精一杯の運動	3.00	2.99 ~ 2.80	2.79 ~ 2.56	2.55 ~ 2.37	2.36 ~ 1.00
	5. 楽しさの体験	3.00	2.99 ~ 2.85	2.84 ~ 2.60	2.59 ~ 2.39	2.38 ~ 1.00
	因子の評価	3.00	2.99 ~ 2.81	2.80 ~ 2.59	2.58 ~ 2.41	2.40 ~ 1.00
学び方	6. 自主的学習	3.00 ~ 2.77	2.76 ~ 2.52	2.51 ~ 2.23	2.22 ~ 1.99	1.98 ~ 1.00
	7. めあてをもった学習	3.00 ~ 2.94	2.93 ~ 2.65	2.64 ~ 2.31	2.30 ~ 2.03	2.02 ~ 1.00
	因子の評価	3.00 ~ 2.81	2.80 ~ 2.57	2.56 ~ 2.29	2.28 ~ 2.05	2.04 ~ 1.00
協力	8. なかよく学習	3.00 ~ 2.92	2.91 ~ 2.71	2.70 ~ 2.46	2.45 ~ 2.25	2.24 ~ 1.00
	9. 協力的学習	3.00 ~ 2.83	2.82 ~ 2.55	2.54 ~ 2.24	2.23 ~ 1.97	1.96 ~ 1.00
	因子の評価	3.00 ~ 2.85	2.84 ~ 2.62	2.61 ~ 2.36	2.35 ~ 2.13	2.12 ~ 1.00
総合的評価（総平均）		3.00 ~ 2.77	2.76 ~ 2.58	2.57 ~ 2.34	2.33 ~ 2.15	2.14 ~ 1.00

【謝辞】

本研究は、立命館大学社会システム研究所による 2012 年度 BKC 社系研究機構研究所重点研究プログラムの助成をもとに行われた。

注

- 1) 例えば、群馬大学と群馬県教育委員会は、連携して教育改革・群馬プロジェクトを立ち上げ、群馬県内の教育の質の向上をねらっている。(大友智編「小学校における体育授業プログラムの開発：ゲーム領域及びボール運動領域を対象として」国立大学法人群馬大学・群馬県教育委員会、2007)。
- 2) この活動においては、小学校によって時間の設定が異なり、朝学習の時間に設定されることもあれば、体育の授業時間に設定されることもある。ただし、一連の指導過程を全て担うわけではなく、あくまでも小学校からの要請に基づいての重要なポイントにおける学習支援である。そのため授業ではなく、体育的活動として述べることにする。
- 2) 学生と教員が掲示板を通じた連絡やレポート課題の提出・添削などを共有できるウェブ上のポートフォリオ。
- 3) 「授業評価」としての意味合いであるが、長縄オリエンテーションは教師による「授業」ではなく、大学生による活動支援であることから本稿では「活動評価」とした。
- 4) なお、ここでの項目は、長谷川らが小学校の42学級1428名の児童を対象に実施した調査のデータを因子分析し、①意欲・関心、②成果、③学び方、④協力の4つの因子を抽出し、さらにこの4因子に対して因子負荷量の高かった項目(あるいは代表的な内容)を9つ選択したものである。体育授業の評価においては、この形成的評価票は信頼性が高いものとして広く用いられている。
- 5) 今回の活動の内容に照らし、調査票原文では「学習」とされている箇所を「練習」に修正した。
- 6) ただし、どの種目別診断基準においても、ほぼ同様の結果であった。
- 7) 偏差からは、ややバラつきが大きいと感じられる。ただ、この点については、通常の体育授業との比較や長縄オリエンテーションの期間全体での分析によってさらなる検討が必要である。

参考文献

- 大友智編「小学校における体育授業プログラムの開発：ゲーム領域及びボール運動領域を対象として」国立大学法人群馬大学・群馬県教育委員会『教育改革・群馬プロジェクト 国立大学法人群馬大学・群馬県教育委員会共同研究 第一部会 特色ある教育課程の開発：「体育」グループ 平成16年度～平成18年度研究成果報告書』2007年、1247頁。
- 大友智、加藤寛司、国仲秀樹、山本貞美「児童の持久走に対する態度の分析—学年・性に関して—」『鳴門教育大学研究紀要』第10巻、1995年、61-76頁。
- 大友智、加藤寛司、国仲秀樹、山本貞美「児童の身体運動に対する態度と持久走に対する態度の関係の検討」『鳴門教育大学研究紀要(生活・健康編)』第11巻、1996年、23-34頁。
- 草津市教育委員会『スポーツ振興計画 —みんなが スポーツ大好き くさつ!—』2011年。
- 高橋健夫編著『体育授業を観察評価する』明和出版、2003年。
- 深見英一郎、高橋健夫「器械運動における有効な教師のフィードバックの検討—学習行動に応じたフィードバックと子どもの受けとめかたとの関係を通して—」『スポーツ教育学研究』第23号第2号、2003年、95-112頁。
- 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎「体育授業の『形成的評価法』作成の試み：子どもの授業評価の構造に着目して」『体育学研究』第39号、1994年、29-37頁。
- 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子「小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み」『スポーツ教育学研究』第14号第2号、1995年、91-101頁。

Effects on Physical Activity in Elementary Schools of Guidance Provided by University Students in Service-learning: Study of Rope Jumping Orientation in Kusatsu City

AKAZAWA Masayo (Associate Professor, College of Sport & Health Science, Ritsumeikan University)

TSUKIDA Naoaki (Supervisor, Kusatsu-city board of Education)

OZAWA Michinori (Associate Professor, College of Sport & Health Science, Ritsumeikan University)

OTOMO Satoshi (Professor, College of Sport & Health Science, Ritsumeikan University)

Abstract

To facilitate academia-government cooperation, in 2011, Ritsumeikan University's Department of Sport and Health Science started service-learning in collaboration with the Kusatsu City Board of Education. University students volunteered to conduct various activities for an event called "Junior Sports Festival (JSF) KUSATSU" in elementary schools.

This paper reports on the assessment of an orientation session on rope jumping—one of the activities in the JSF—and discusses its effects on physical activity in elementary schools. The results indicate that the orientation sessions were well received. In particular, the elementary school students gave high scores to "motivation" and "experience with impression". Additionally, a feedback analysis showed that concrete and corrective feedback from the university students was highly evaluated by the elementary school students. The results suggest that the provision of adequate feedback is quite effective as an instruction method, especially for the acquirement of concrete skills and learning strategies.

Keywords

Academia-government, Cooperation, School Volunteers, Assessment of Activities, Feedback